

研究プロジェクト成果報告書（一般研究・特別研究）

研究課題 「21世紀を生き抜くための能力を育てる
～自分をつくり未来を拓く子どもが育つ学校～」

研究期間 平成30年度～平成31年度（令和元年度）

研究代表者 上越教育大学附属小学校 校長 大場 浩正

研究組織

氏名	所属・職名	役割分担
大場 浩正	附属小学校・校長	研究代表者；研究の総括指導
松岡 博志	附属小学校・副校長	研究分担者；実践研究の総括
山之内知行	附属小学校・教頭 他 教諭17名	研究分担者；研究の立案、評価
林 泰成	上越教育大学・教授 他 大学教員16名	研究協力者；理論的、専門的見地からの指導
関原るみ子	上越教育事務所指導主事	研究協力者；県行政の見地からの指導
金子 愛	上越市大手町小学校・教諭 他 公立小学校教諭20名	研究協力者；公立校からのデータ収集、活動 構想検討

1 研究開発課題

目指すべき21世紀を生き抜く能力をもつ子どもを「自分をつくり未来を拓く子ども」と置き、子どもの「問い」が立ちあがる4つの教育活動（創造活動、実践道徳、実践教科活動、集団活動）による教育課程開発に関する研究を行う。

2 研究の概要

これからの日本を展望する時、開催直前で盛り上がる東京オリンピック・パラリンピックや大阪万博に伴う、新たな施設整備の拡充や諸外国との関係の深まりといった期待がある。

しかし、その陰で、長期にわたって継続する人口の減少と高齢化の進行に歯止めが掛からず、労働力不足と福祉、医療、介護にかかる財政面での不安は大きくなっている。また、進歩するAI技術は、インターネット利用の促進によって得られる大量のデータと連動することで人々の生活環境と労働環境にさらなる変化をもたらし、新たな社会的な課題を浮かび上がらせている。

これまで人間が行ってきたことをAI技術が代替することによって、合理性や効率性が高まり、人々の時間的、空間的な制約が軽減される新たな生活が創出される。新たな生産や流通、消費の形態や、通貨の仕組みが構築されたり、人と人とのつながり方に新たな様式が生まれたりすることが考えられる。

合理性や効率性が高まり、人々の時間的、空間的な制約が軽減される生活によって、アイデア次第で新しい希望をつくり出すことができる、可能性の時代が到来すると言える。そのような時代にあっては、人間が人間らしく生きるということの意味や、人間とAI技術とのかかわりの在り方など、人々に価値観の変化が起こると考えられる。

自分の生き方を見つめる見通しが不透明でありながらも、新たな生活の創出が期待される社会だからこそ、これまで以上に、一人一人が自分の生き方を見つめることの重要性が高まる。なぜなら、新たな生活をつくる主体として、自ら意志決定し行動することを通して、人々は、社会の中で変化する意味や価値の本質を捉え、自分と社会の関係を新たにすることができるからである。社会の変化を自分事として引き受け、起きていることを注意深く捉え、思慮深く判断し、未来の社会像を描きながら新しい考え方や行動様式をつくり出す21世紀を生き抜く生き方が求められる。

以上のような考えから「自分をつくり未来を拓く子どもが育つ学校」を研究主題とした。

「問い」が立ちあがる新たな社会を創出する子どもには、複雑化する社会の変化の本質を自ら捉え、課題の解決に向けて自ら行動することが求められる。新しい考え方や行動様式をつくり出す生き方は、発達に応じて、豊かな体験の中に湧き上がる自身の思いや願いを実現させたり、社会の矛盾や価値の対立への気づきと向き合い、解決しようとしたりする活動を通してかたちづくられると考える。

自身の思いや願いの実現、社会の矛盾や対立の解決に向けて、自らの行為や価値観を捉えながら、自分の見方、考え方を見つめ、創造的に思考し、行為する子どもの根源となる

ものを、私たちは、子どもの「問い」と捉えた。子どもは、身の回りの事実について、自分が捉える認識が基となりながら、自分とのかかわりとして新たな社会をつくりだそうとする。それは、自分をつくり未来を拓く子どもを具現する姿であると考えている。

「問い」が立ちあがる教育活動をつくる子どもの「問い」が立ちあがる教育活動は、教師自身の、社会に対する問題意識を基とし、子どもが出あう矛盾や対立を思い描くことが重要である。子どもの発達の違いを鑑み、柔軟に構想・展開をつくり変える教師の活動づくりも基盤となる。つまり、生活の事実に内包される、子どもが向き合うことに値する問題意識を確かにもつ教師が、「問い」が立ちあがる子どもを捉えてつくり変える教育活動によって、自分をつくり未来を拓く子どもが育つと考えた。私たちは、「子どもの『問い』が立ちあがる教育活動」を模索することを通して「自分をつくり未来を拓く子どもが育つ学校」の具現に取り組んできた。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

子どもの「問い」が立ちあがる姿に着眼しながら、創造活動を中核とした4つの教育活動を構想・展開することを通して、21世紀を生き抜く能力をもつ「自分をつくり未来を拓く子ども」を育てる。

(2) 教育課程を編成する4つの教育活動

「創造活動」	<ul style="list-style-type: none"> 生活科と総合的な学習の時間を統合し、全学年において実施する。 対象と息長くかかわりながら、自然・人・文化をありのままにとらえる活動を設定する。 教育課程の中核に位置付け、他の3つの教育活動との関連を図る。
「実践教科活動」	<ul style="list-style-type: none"> 実践国語科、実践社会科（3～6年）、実践算数科、実践理科（3～6年）、実践音楽科、実践図画工作科、実践体育科、実践家庭科（5～6年）、実践外国語科（4～6年）で構成する。 教科の知識や技能を自ら構成する実践的な活動づくりに取り組む。
「実践道徳」	<ul style="list-style-type: none"> 創造活動等の実践を基に、自分や自分たちの在り方を深く見つめる時間を全学年において設定する。
「集団活動」	<ul style="list-style-type: none"> 学級活動、プレイングチーム活動、集会活動、プロジェクト活動（5～6年）、サークル活動（4～6年）、学校行事で構成する。

4 研究成果の概要

(1) 「問い」が立ちあがる教育活動

○「問い」とは

新たな社会を創出する子どもには、複雑化する社会の変化の本質を自らとらえ、課題の

解決に向けて自ら行動することが求められる。新しい考えや行動様式をつくり出す生き方は、発達に応じて、豊かな体験の中に湧き上がる自身の思いや願いを実現させたり、社会の矛盾や対立への気付きと向き合い、解決しようとしたりする活動を通してかたちづくられると考えられる。

自身の思いや願いの実現、社会の矛盾や対立の解決に向けて、自らの行為や価値観をとらえながら、自分の見方、考え方を見つめ、創造的に思考し、行為する子どもの原動力を、子どもの「問い」ととらえた。

○【時間】【空間】【集団・社会】のとらえをひろげる子どもに着眼した活動づくり

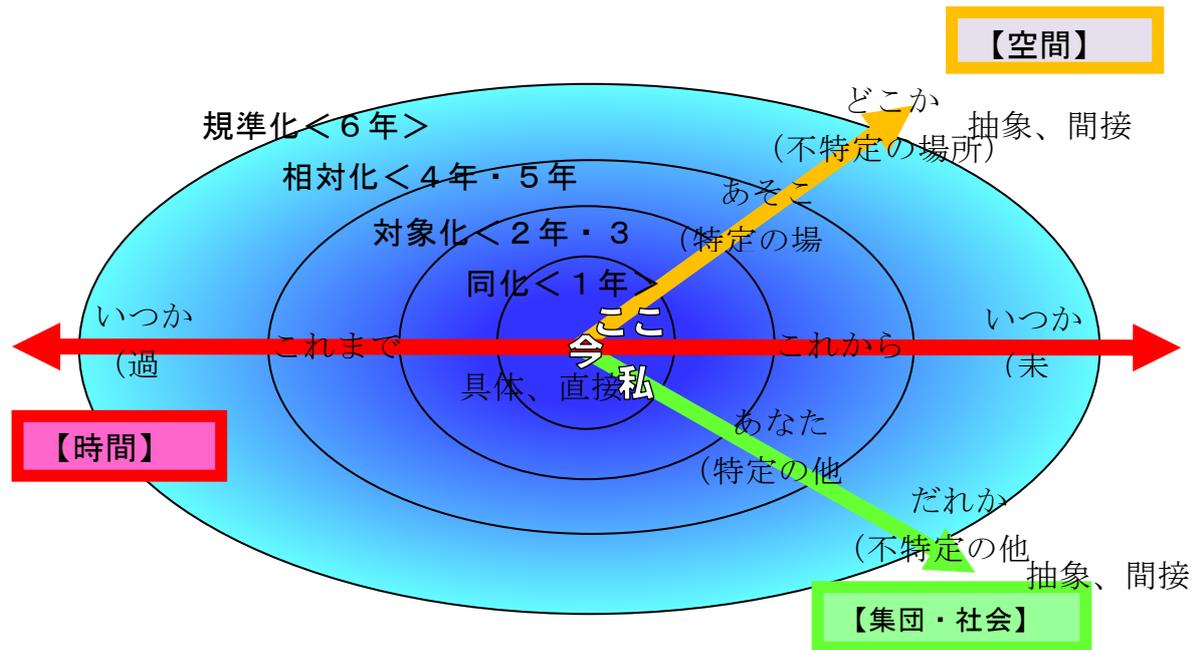
自分をつくり未来を拓く子どもの具体を見出そうとした私たちは、「体験する姿」「思考、判断する姿」「他者と生きる姿」の視点で、子どもを見つめ直すことからはじめた。すると、1年生から6年生までの連続する差異の特徴的な姿が見えてきた。（表1）

表1) 1年生から6年生までの連続する差異の特徴的な姿

1年生から6年生までの連続する差異の特徴的な姿			
	体験	思考、判断	他者と共に生きる
1年生の子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・旺盛な好奇心に支えられ、個別的に対象にかかわりながら日常の楽しみをつくる。 ・変化することを楽しみ、思わず体が動き出す。 ・単純な具体物をつくり出し、その行為自体を楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ごく短い時間、ごく近い空間的距離をとらえる。 ・具体について、直感的、即時的、空想的にとらえる。 ・およその出来事を成功としてとらえる。 ・体験したことを同化しながらそのままとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・素直で率直、親和的に他者とかわる。 ・他者が自分と同じであることを喜ぶ。
2年生の子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・旺盛な好奇心に支えられ、身近な仲間と共に対象にかかわり試行錯誤しながら日常の楽しみをつくる。 ・変化することを楽しみ、思わず体が動き出す。 ・やや複雑な具体物をつくり出し、その行為自体を楽しんだり、他者にひらいたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・短い時間、近い空間的距離をとらえる。 ・具体を基に、直感的、空想的にとらえる。 ・およその出来事を成功としてとらえる。 ・体験したことを客観的なものへと対象化しながらとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・素直で率直、親和的、共感的に他者とかわる。 ・身近な仲間として他者が自分と同じであることを喜ぶ。
3年生の子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・旺盛な好奇心に支えられ、活動の範囲を校外にひろげることで生じる新たな対象との出会いから楽しみをつくる。 ・変化することを楽しみ、思わず体が動き出す。 ・身近な仲間と共に、多様なアイデアを生み出しながら、発見を連続させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・やや長い時間、やや遠い空間的距離をとらえる。 ・具体を基に、直感的、空想的にとらえる。 ・行為と行為の因果関係をやや意識し、失敗してもやり直そうとする。 ・体験したことを客観的なものへと対象化しながらとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・共感的に他者とかわる。 ・身近な仲間として、他者と喜びを共有する。 ・自分が他者と同じであることを喜ぶ。
4年生の子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・具体物をつくり対象について調べたりしながら、対象に内包される生活の事実の意味や価値を求める。 ・経験に基づき多様なアイデアを生かし活動する。 ・身近な仲間と共に、多様なアイデアを生み出しながら、発見を連続させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・やや長い時間、やや遠い空間的距離をとらえる。 ・やや空想的、やや抽象的にとらえる。 ・行為と行為の因果関係を意識し、失敗してもやり直そうとする。 ・具体から概念をつくり出す。 ・体験したことを相対化しながら既知の知識とつなげてとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・共感的、調和的に他者とかわる。 ・身近な仲間として、他者と喜びを共有する。 ・自分が他者と同じであるかやや不安を抱く。 ・集団の中で、自分の立場を意識しながら他者とかわる。
5年生の子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・具体物をつくり対象について調べたりしながら、対象に内包される生活の事実の意味や価値を求める。 ・経験に基づき見通しをもって活動する。 ・仲間と共に、発見したことに意味や価値を見いだす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長い時間、遠い空間的距離をとらえる。 ・抽象的、やや論理的に自分の価値観をつくる。 ・行為と行為の因果関係を意識し、経験に基づき成功に向かうとする。 ・具体と抽象をつなげて概念をつくり出す。 ・体験したことを相対化しながら客観的事実とつなげてとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調和的、寛容的で、複雑な感情をもちながら他者とかわる。 ・自分が他者と同じであるかやや不安を抱く。 ・集団の中で、他者に憧れを抱きながら他者とかわる。
6年生の子ども	<ul style="list-style-type: none"> ・具体物をつくり対象について調べたりしながら、対象を内包する文化や歴史に関する専門的な見地を求める。 ・経験に基づき見通しをもって活動する。 ・仲間と共に、知的なおもしろさを求めたり、発見したことに意味や価値を見いだしたり、新たな考えを生み出したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・より長い時間、より遠い空間的距離をとらえる。 ・抽象的、論理的に、社会生活とのつながりをとらえながら自分の価値観をつくる。 ・行為と行為の因果関係を意識し、経験に基づき成功に向かうとする。 ・具体と抽象や抽象と抽象をつなげて概念をつくり出す。 ・体験したことを規準化しながら客観的事実とつなげてとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・複雑な感情をもちながら、大局的に、集団をよりよくしようと他者とかわる。 ・自分が他者と同じであるか不安を抱く。 ・集団のリーダーとして他者とかわろうとする。

連続する差異に着目しながら1年生から6年生までの子どもの姿を見つめていくと、学年が上がるにつれて、「今、ここ、私」を中心として【時間】【空間】【集団・社会】のとらえを同心円状にひろげる子どもの様相が見いだされた。（図1）

図1) 【時間】 【空間】 【集団・社会】 のとらえをひろげる子どもの様相



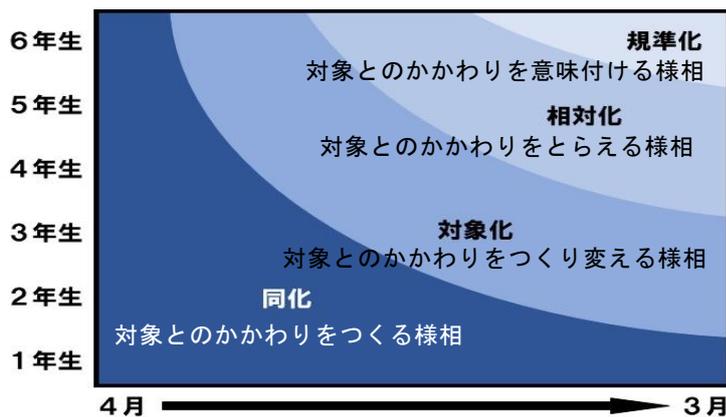
子どもの「問い」が立ちあがる教育活動を展開していくには、子どものとらえの、時間的、空間的、集団・社会的なひろがりに着目した活動づくりが必要であることが明らかになった。

活動づくりにおいては、表1や図1を勘案しながら、1年生から6年生までの連続する差異によって違いはあっても、対象と直接かかわる体験を大切に、対象とのかかわりから自分の世界をひろげたり、つくったりする子どもの姿を思い描くことが、子どもの「問い」が立ちあがる教育活動の要件として明らかになった。

○ 対象とのかかわりから自分をつくる創造活動

創造活動においては、子どもが対象とどのようにかかわるのかを見つめ続けてきた。すると、創造活動における子どもの「問い」が立ちあがる姿に差異があり、およそ4つの様相があることが明らかになった。(図2) 1年生では、およそ年間を通じて対象とのかかわりをつくる様相が現れ、学年が上がるにつれて、対象とのかかわりをつくり変える様相、対象とのかかわりをとらえる様相も現れ、6年生では対象とのかかわりを意味付ける様相も現れることが分かった。

図2) 創造活動において対象とかかわる子どもの様相



6年1組創造活動「For You For Me」は、子どもがつくり出すものを対象とし、つくったものを売ったり、渡したりし、ものを介して自分と人とかかわるということを見つめる活動である。

4月、子どもはまずハンカチづくりに取り組んだ。ハンカチを藍で染めたり刺繍を施したりして、世界に一つしかないハンカチを作った。その後、子どもはハンカチだけでなく、手作り石鹸やヘアゴムなど、自分がもらって嬉しいものをつくることを通して、対象とのかかわりをつくっていった<同化>。6月、学校近くのお寺で開催される縁日で、自分のつくったものを販売したいと願った子どもは、自分でつくったものを商品として見つめ直すことで、対象とのかかわりをつくり変えた<対象化>。10月には、6月に行ったお寺での商品販売と、これから行う東京での商品販売を比較することで、東京での商品販売で大切にしていきたいことを確認し、対象とのかかわりをとらえた<相対化>。11月に入り、これまでの商品販売や高齢者施設での活動を経て、子どもは「For You For Me」における対象とのかかわりを意味付けていった<規準化>。

このように、創造活動で現れる子どもの4つの様相を勘案し、子どもが対象とどのようにかかわるのかを思い描いた活動づくりが、子どもの「問い」が立ちあがる創造活動をつくる要件となることが明らかになった。

○ 他者とかかわりから自分を見つめる集団活動

集団活動において、子どもが他者をどのようにとらえて、かかわりをつくっているのかを見つめ続けてきた。

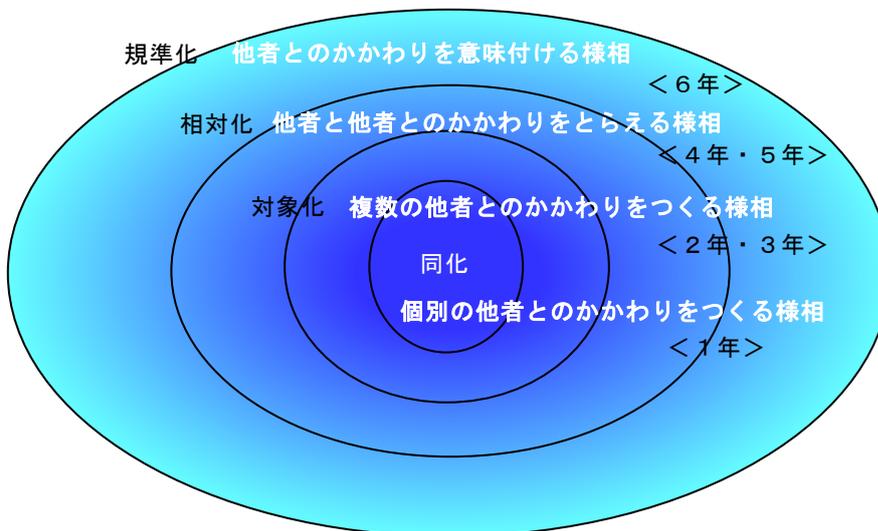
4月、1年生を迎える会で、初めてプレイングチームが集まった。6年生は、チームをまとめることの楽しみや不安を抱きながら、リーダーとして活動しようとする姿があった。2年生には、一年前の自分の姿と重ねながら、1年生をチームに迎えようとする姿があった。

仲間同士のかかわりがひろがってきた9月、プレイングチームで一日を過ごす「ポプライメント」があった。プレイングチームの仲間とかかわる子どもの姿から、子どもが集団をとらえる様相に違いが見られた。1年生には、他者と一対一でかかわりながら集団を楽しむ姿。2年生や3年生には、かかわる他者を増やしながらかつ団を楽しむ姿。4年生や5年生には、他者の姿をとらえながらかつ団における自分を見つめる姿。6年生には、仲間

の喜びや成長を自分の喜びとしたり、よりよい集団の在り方を見つめたりする姿があった。

このような子どもの姿から、集団活動において他者とのかかわりをひろげる子どもの4つの様相が明らかになった。(図3)

図3) 集団活動において他者とのかかわりをひろげる子どもの様相



私たちは、他者とのかかわりを意味付ける6年生であっても、個別の他者とのかかわりをつくることは大切だと考えている。プレイングチーム活動に限らず、一人一人の仲間とのかかわりをひろげながら、子どもは集団とのかかわりをつくり、つくり変えていくと考える。

子どもが多様な他者とかかわりをつくるには、活動前の期待づくりと振り返りが大切であることも明らかになった。活動前の子どもは、楽しみや喜び、不安や心配など、多様で複雑な思いをもっている。その全てを活動への期待であるにとらえ、期待づくりを大切にしている。そして、活動後の振り返りが、さらなる期待づくりへとつながると考えた。

集団活動において、他者とのかかわりをひろげる子どもの様相を勘案し、期待づくりと振り返りを繰り返すことが、子どもの「問い」が立ちあがる集団活動をつくる要件であることが明らかになった。

(2) アンケート実施による成果

以下の表は、児童と保護者の学校評価アンケートの結果である。それぞれ、「課題をもって意欲的に学ぶこと」「分かる、できるまで取り組むこと」「自分の考えをもち、上手に表現できること」「対象と主体的にかかわり、自分らしい考えをつくること」は、21世紀を生き抜くための大切な能力である。結果は、令和元年12月実施(上段)と令和元年7月実施(下段)のものである。

評価は、「はっきりハイ」「だいたいハイ」と、他に「わからない」「ちょっとイイエ」「はっきりイイエ」の5段階評価。

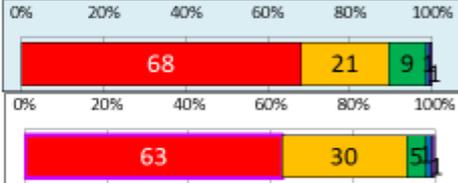
<Study> 授業を大切にします

・ 課題をもって意欲的に学ぶ子

児1) 学校での活動が楽しい



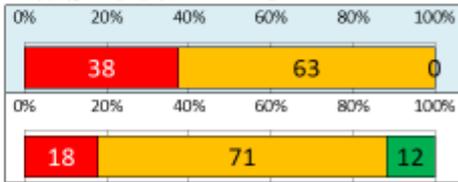
児2) 学校の活動で「やってみたい」「おもしろい」と思うことがある



保1) お子さんは、学校に行くことを楽しみにしている



教1) 子どもは、課題をもって意欲的に活動に取り組んでいる



「課題をもって意欲的に学ぶこと」についての評価である。児童、保護者、教師ともに肯定率が約90%と、子どもが意欲的に学んでいることが分かる。教師の評価では、前期よりも子どもの姿を肯定的にとらえている割合が増えた。活動を積み重ねることで、自分の課題も明確になってきたことの表れだと考える。

・ 分かる、できるまで取り組む子

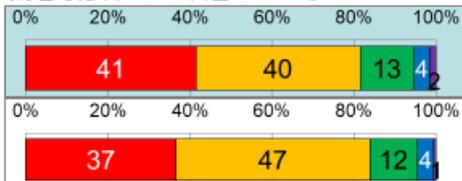
児3) 授業がよくわかる



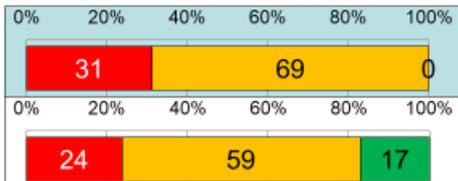
児4) 分からないことがあると、先生や友だちに質問したり、相談したりする



保2) お子さんは、家庭学習や自分の役割を最後までやり通している



教2) 子どもは、自らの道筋と歩調で知識や技能をつくり変え、ものの見方や考え方をひろげている



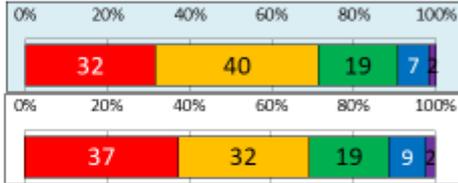
「分かる、できるまで取り組むこと」についての評価である。児童の「授業がよく分かる」の肯定率は85%である。

・ 自分の考えをもち、上手に表現できる子

児5) 自分の考えを生かしながら活動する



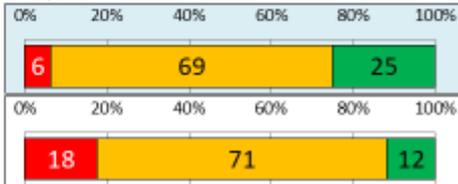
児6) 自分の思っていることを周りの人に分かりやすく伝える



保3) お子さんは、自分の考えを相手に分かりやすく伝えている



教3) 子どもは、自分の考えをもち上手に表現している



「自分の考えをもち、上手に表現できること」についての評価である。「自分の思っていることを周りの人に分かりやすく伝える」の肯定率は、児童 72%、保護者 71%、教師 75%といずれも 80%を下回っている。「自分の考えを生かしながら活動する」の肯定率 85%と比べると、自分の思いや考えを相手に伝えるという点で課題があると言える。自信をもって相手にも伝えられるよう、意図的に機会を設けることが課題と言える。

<Creation> 総合的な教育活動を大切にします

・ 対象と主体的にかかわり、自分らしい考えをつくる子

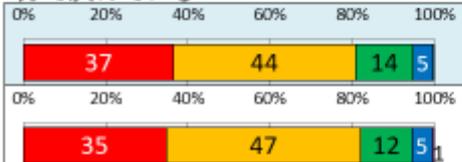
児15) 進んで活動に取り組み、感じたことや考えたことを話したり、書いたりする



教10) 子どもは、「人・もの・こと」とかかわりながら新たな自分を見付けたり、行動したりしている



保10) お子さんは、自分のすることを自分で決めている



教11) 子どもは、自らの意思で行動判断しながら道徳的な価値観をつくっている



「対象と主体的にかかわり、自分らしい考えをつくること」についての評価である。教師の肯定的な評価が前期に比べ向上している。その結果が示すように、前期からの継続的

な活動を通して、主体的に行動する子どもの姿や、道徳的な価値観をつくる子どもの姿が多く見られるようになった。

○子どもの評価から

全体的に子どもの学校生活に対する自己評価の高さが見てとれる。特に、活動そのものを楽しさを感じたり、仲間とともに活動したり、自己の成長に気付いたりすることに肯定的な評価をしている子どもが90%を超える。これらは、「創造活動」を中核とした教育課程の成果の一つであると考ええる。

○保護者の評価から

子どもが「学校での活動が楽しい」と感じているように、保護者も子どもの様子から同じように感じとっていることがわかる。子どもと保護者の評価が一致するものであり、当校の教育課程における成果の一端を表していると言える。

また、以下のような自由記述欄における保護者のコメントからは、創造活動を中心に子どもの姿から活動の価値や意義に関する言及が多く見られた。

【自由記述欄における保護者のコメント】

- ・学校で新しいことを体験したり、知らなかったことを教えてもらったりするのが嬉しい様子で、毎日学校に行くのが楽しいと言っています。目をキラキラさせて「今日はこんなことを教えてもらったよ～」と話してくれます。
- ・創造活動等を通じて、楽しみをもって学校生活が送れています。先生方のご指導のおかげだと思います。
- ・音楽集会の上学年の歌声に感動しました。友だちを大切にすることが根底にあるご指導が歌に表れていました。温かい歌声からもそれが伝わってきました。

5 研究成果の発表状況・研究成果の還元

(1) 2019研究会

2019年11月22日（金）に2019年研究会を開催した。研究会では、研究発表、全体活動公開（3学級）、学年別協議、合同協議、音楽集会（全校）、活動公開（9学級）が行われ、市内・県内はもとより、全国の教育関係者総勢634名が集まり、研究の成果を発表・還元することができた。

(2) 研究リーフレット

今年度より、研究紀要に代わるものとして、研究リーフレットを作成し、研究会の参加者に配付した。研究リーフレットにしたことで、限られた誌面のため、研究内容が焦点化され、附属小の研究が分かりやすくなったと好評であった。研究リーフレットを介して、研究内容についての問い合わせ依頼が来るなど、附属小の研究に関心を持ってもらうきっかけとなっている。